

## 社会的排斥に対する正統性評価尺度の作成

玉井 颯 一<sup>1)</sup> 五十嵐 祐<sup>2)</sup>

### 問題と目的

集団への所属に根源的に動機づけられる人間にとって (Baumeister & Leary, 1995), 他者からの拒絶や集団からの孤立は深刻な問題となる (Eisenberger, Lieberman, & Williams, 2003; Williams, 1997, 2007)。しかしながら, こうした孤立を生み出す社会的排斥は, 現代社会において後を絶たない (Nezlek, Wesselmann, Wheeler, & Williams, 2012)。排斥された個人 (以下, 被排斥者) が心理的に悪影響を受けることは, 周知の事実であるにもかかわらず, なぜ他者を排斥する個人 (以下, 排斥者) は存在し続けるのであろうか。この問いに答えるため, 本研究では, 排斥実行場面において人間は特定の他者を排斥することが正統な行動であると評価していることを示し, その程度を測定するための心理尺度を作成する。

“なぜ集団から特定の個人を排斥するのか” という問いについて, 進化心理学をはじめとする従来の研究は, 生物の生存上の適応という視点から, 人類の進化の過程で社会的排斥が重要な役割を担ってきたと主張している (Kurzban & Leary, 2001; Leary & Cottrell, 2013; Sasaki & Uchida, 2013)。Ouwkerk, Van Lange, Gallucci, & Kerr (2005) は, 利己的で非協動的にふるまうことで他成員の生存上の脅威となるフリーライダーを集団から排斥することが, 集団内の協調関係を維持する上で有効であると同時に, 新たなフリーライダーの出現を予防するためのサンクション (制裁) にもなると論じている。Tomasello (2014) も, フリーライダーを排斥することが, 集団成員間の協調関係を回復するための方略として有効に機能すると指摘している。このように, 社会的排斥は, 集団内に不利益をもたらす個人を追放するための浄化システムとしてとらえることができる。

しかし, 近年の社会的排斥研究では, 現代社会におい

て社会的排斥を実行することが, きわめて困難になっていることも明らかにされている。Wesselmann, Wirth, Pryor, Reeder, & Williams (2013) は, 人々が“他者と相互に受容し合うべきであり, 他者を排斥するべきではない” という受容規範を内在化していると述べている。受容規範により, 人々は被排斥者に同情しやすく, 未知の他者が排斥されている場면을傍観するだけでも, 社会的痛み (Eisenberger & Lieberman, 2004) や強いストレス反応 (Wesselmann, Bagg, & Williams, 2009) を喚起する。また, 人々が受容規範を共有していることから, 他者を排斥することが一般的には支持・容認されにくく, 排斥を実行する際に人間は評価懸念を経験する (Chen, Poon, Bernstein, & Teng, 2014)。こうした知見は, 受容規範のはたらきによって, 社会的排斥が強く抑制されていることを示唆している。

それでは, 現代社会において, 人間はなぜ社会的排斥を実行し続けられるのだろうか。この問いに対する回答を提供するために, 本研究では正統性 (legitimacy) という概念に注目する。正統性とは, 公正な手続きにより導かれた行動への信頼や義務として定義される (Tyler, 1997)。人々が, 政治的指導者といった意思決定をおこなう権威者や, 警察や裁判所といった決定手続きを運用する組織の成員に対して自発的に服従するのは, 行動, 判断, 意思決定の手続きが公正であると評価できる場合である (Tyler, 1997, 2006)。また, 公正な手続きを採用することで, 権威者や組織の成員は他者からの否定的な評価を防ぐことができる (Tyler, 2012)。従来の正統性研究では, 手続き的公正を満たすための基準として, “代表性” の重要性が指摘されてきた (e.g. Blader, & Tyler, 2003; Tyler, Boeckmann, Smith, & Huo, 1980 大淵・菅原訳 2000)。代表性とは, “ある行動, 判断, 意

- 1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 五十嵐祐准教授)
- 2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

1. 本研究のデータ収集にあたって, 吉澤寛之先生 (岐阜大学大学院) にご協力を頂きました。また, 本稿を執筆するに際して, 浅野良輔先生 (浜松医科大学) にご指導いただきました。記して感謝申し上げます。

思決定が、一部の人もしくは特定の人間の価値や関心に偏重したのではなく、大多数の人々の価値、関心が反映されたものであること”とされる（詳細なレビューはLeventhal, 1980を参照）。すなわち、個人がある特定の行為について、限られた一部の人間にとって価値のあるものではなく、大多数の人間にとって価値の高いものであると評価すれば、その行為は正統なものみなされやすくなる。

こうした議論を踏まえると、人間は、“社会的排斥を行うことが大多数の人々に利益をもたらす”と社会的排斥に対して正統性を評価することで、周囲の他者から否定的に評価される可能性を低く見積もり、受容規範に従わず社会的排斥を実行しやすくしていると考えられる。そこで本研究では、受容規範を乗り越えて、個人を社会的排斥の実行へと促す心理要因として、“社会的排斥に対する正統性評価”に注目する。社会的排斥に対する正統性評価とは、多くの団員利益を高め、集団それ自体を存続させるために有効な方略として社会的排斥を評価することである。社会的排斥に対する正統性を高く評価するほど、個人が内在化している受容規範が弱まり、社会的排斥を実行しやすくなると考えられる。事実、ある個人を排斥することが、大多数の人々に利益・価値をもたらす高い正統性をもつ行為であると評価することで、周囲の人々から批判される可能性は低くなると考えられる。先行研究では、暴動やクーデターといった、一般的には非倫理的・非道徳的に評価される行動であっても、その行動が多数の人々の利得を最大化する方略（*e.g.* 多くの市民の健康的で安心な生活を獲得するため）であると主張した場合は、他者から容認されやすくなることが明らかにされている（Thomas & Louis, 2013）。こうした心理プロセスは、社会的排斥に関しても、同様に見られるであろう。

さらに、社会的排斥に対する正統性評価は、(a) マキャベリアニズム、(b) 予防焦点、(c) 用心深さ、(d) 費用・利益計算といった、既知の心理学的概念とある程度の関連をもつものの、完全に一致した概念ではないことが予測される。まず、社会的排斥に対する正統性評価は、目的を達成するためならば、対人関係において冷淡な他者操作さえも容認するマキャベリアニズムと共通している。しかし、マキャベリアニズムが、利己性や感情の希薄さ、サイコパシー傾向など反社会的パーソナリティと関連するのに対し（中村・平石・小田・齋藤・坂口・五百部・清成・武田・長谷川, 2012）、社会的排斥に対する正統性評価は、あくまで自己を含む集団全体の利益を志向する概念である。すなわち、どちらの概念も、対人関係における他者操作を志向する点で共通する部分を

もつものの、そうした行動の動機が利己的か協同的かという点で異なっている。

また、社会的排斥が集団内のコストを追放する浄化システムであるならば、社会的排斥に対する正統性評価もまた、コストを回避する個人の志向性と関連するであろう。コストを回避する傾向を反映した個人差要因としては、制御焦点理論（Higgins, 1998）における予防焦点や、一般的信頼理論（山岸・小見山, 1995）における用心深さがある。予防焦点と用心深さ、社会的排斥に対する正統性評価は、いずれも自分自身にとって、身近なコストの回避を志向するという点で類似する概念と考えられる。すなわち、予防焦点や用心深さのようにコストを取り除こうとする志向性が強いほど、社会的排斥を用いても、集団内のコストとなる成員を取り除こうとする傾向が強いと考えられる。

さらに、本研究では社会的排斥に対する正統性評価と関係性モデル（Fiske, 1992）との関連を検討する。関係性モデルとは、個人が他者との社会関係のどのような側面に注意を向けるのかを考察する理論である。特に、関係性モデルの類型の一つである費用・利益計算は、“他者との関係に所属することによって、自分自身の利益が増大するのに注意を向ける個人の心理傾向”と定義され（Haslam, 1994）、社会的排斥に対する正統性評価と概念的に類似する。なぜなら、どちらの概念も、人間の行動が“利益を最大化”して“損失を最小化”するように動機づけられることを想定しているからである。ただし、社会的排斥の正統性評価が自分自身を含む多数の人々の利益を拡大し、コストを縮小するという協同的な動機であるのに対し、関係性モデルの費用・利益計算は自己の利益を拡大し、損失を縮小することのみを動機として想定している。これら二つの概念は、人間の行動が利益追求と損失回避に動機づけられると想定している点で類似するものの、その根本的な動機が協同的か利己的かという点で異なるだろう。

## 本研究の概要

本研究では、社会的排斥の正統性を評価する程度を測定する心理尺度を作成し、その信頼性と基準関連妥当性を検討する。まず、社会的排斥に対する正統性評価尺度を作成し、その因子構造と内的整合性を確認する。次に、この尺度と理論的な関連が想定される既存の心理尺度を用いて、基準関連妥当性を検討する。具体的には、マキャベリアニズム、予防焦点、用心深さ、費用・利益計算との関連を検討する。

## 方法

**調査対象者** 2013年7月から10月にかけて、愛知県内の3大学に通う大学生に対して、質問紙調査をおこなった。いずれの大学でも、対人関係に関する意識調査として調査を実施した。調査対象者は、合計517名であった。サンプルの構成は、2013年7月に調査を実施した国立大学の学生49名（サンプルA）と、2013年10月に調査を実施した私立大学の女子学生172名（サンプルB）、私立大学の学生168名（サンプルC）、国立大学の学生128名（サンプルD）の4つの調査対象者群を用いた。最終的な分析は、回答に不備のあった4名を除く、513名（男性208名、女性305名）を対象に実施した。最終的な分析対象の平均年齢は19.75歳（ $SD = 1.14$ 歳）であった。

**手続き** いずれのサンプルを対象とした調査も、講義時間内に実施した。調査者が、調査への参加は任意であること、プライバシー保護の手続き、調査目的を教示し、同意した学生のみが調査に参加した。調査に参加した学生は、コースクレジットや調査報酬を受け取った。調査に要した時間は20分程度であった。

**測定内容** 社会的排斥を実行することが、集団成員の利益、もしくは集団の存続と密接に関連していると評価している程度を測定するために、新たに10項目を作成した。実際の調査に際しては、“あなたは集団のメンバーの付き合い方はどのようにあるべきだと考えていますか。以下のそれぞれの項目について、自分の考え方もっともあてはまる数字に丸をつけてください”と教示した。それぞれの項目に対して、1（まったく当てはまらない）から5（非常に当てはまる）の5件法で回答を求めた。これらの10項目は、全ての調査対象者群に対して測定した。

サンプルCとサンプルDを対象とした質問紙には、基準関連妥当性を検討するための項目が含まれていた。サンプルCに対して配布された質問紙は、(1) マキャベリアニズム尺度（古賀, 2000; “最終的にグループを成功に導くためなら、仲間から誤解されたとしても仕方ないと思う”など10項目、5件法）、(2) 用心深さ尺度（山岸・小見山, 1995; “ほとんどの人は、口では何と言っても、本心では他人を助けるために骨を折ることをいやがっている”など7項目、5件法）から構成されていた。

一方、サンプルDに配布された質問紙は、(1) 促進予防焦点尺度のうち、予防焦点因子の尺度項目（尾崎・唐沢, 2011; “私はたいてい、悪い出来事を避けることに意識を集中している”など8項目、5件法）、(2) 関係性モデル尺度のうち、利益・費用計算因子の尺度項目（Haslam, 1994; “(特定の友人との関係において) あなたが得られ

る価値の大きさは、あなたが友人のためにどのくらいの時間や労力をつぎこんでくれたかによる”など2項目、5件法）から構成された。

## 結果

**因子構造の確認** 社会的排斥に対する正統性評価を測定する10項目の因子構造を確認するために、全サンプル517名のデータに対して、探索的因子分析（最尤法）を実施した（Table 1）。その結果、固有値の減衰状況は3.74, 1.12, 1.06となり、MAPテストでは1因子解が推奨された。これらの結果と、因子の解釈可能性を考慮し、第2因子以降を剰余因子と判断した。次に、第1因子に対して、因子負荷量が.40以下の値を示した2項目（“他のメンバーのために行動する人こそ、集団で必要とされるメンバーである”、“きまりを守ることが出来ない人であっても、温かく見守ることが必要である”）を分析から除外し、残った8項目に対して、1因子を暫定的に設定した因子分析を再度行った。その結果、初回の分析と同様に1因子解が最も妥当である可能性が示された。

次に、探索的因子分析によって得られたモデルのデータへのあてはまりを検証するため、全サンプルに対して8項目での確認的因子分析（最尤法）を行った（Figure 1）。その結果、探索的因子分析では十分な因子負荷量を示していた1項目（“集団に対して協調的でない人をのけ者にすることは許されない行為である”）の因子負荷量が低く、この項目を除外することで、データに対するモデルの当てはまりが最も高くなった（ $\chi^2(14) = 90.341$ ,  $p < .01$ , CFI=.92, RMSEA=.104）。なお、標本サイズが比較的大きいため $\chi^2$ 値が有意な値を示したが、その他の適合度指標が比較的良好な値を示す場合、大きな問題は無いとされる（朝野・鈴木・小島, 2005）。

以上の結果から、社会的排斥に対する正統性評価尺度は、これ以降、7項目1因子で構成される尺度として扱う。

**内的整合性の検討** 社会的排斥に対する正統性評価尺度の信頼性を検討するために、7項目の $\alpha$ 係数、ならびに各項目と尺度得点とのI-T相関係数を算出した。その結果、 $\alpha$ 係数は.80と十分に高く、十分な内的整合性が認められた。また、I-T相関係数は.63から.79であり、各項目と尺度得点との間に強い関連が認められた。これらのことから、社会的排斥に対する正統性評価尺度は、一定の信頼性を有することが確認された。

**基準関連妥当性の検討** 社会的排斥に対する正統性評価尺度の基準関連妥当性を検討するために、サンプルCの168名とサンプルDの128名のデータのみを用いた分析を行った。まず、本研究で用いた全ての心理尺度が、十分な信頼性をもつのか調査対象者群ごとに検討した。

Table 1 社会的排斥に対する正統性評価尺度の因子分析結果（最尤法）

	F1	M	SD	$h^2$
10 集団に不必要なメンバーを取り除くことは、行われるべき行為である	.763	3.09	1.13	.575
1 誰かを集団の活動に参加させなくても、それにより集団が一致団結するなら仕方がない	.707	3.00	1.07	.504
9 高い業績を挙げている集団では、集団から排除されるメンバーがいるのは仕方がない	.606	2.41	1.08	.355
6 集団に不必要なメンバーが抜けていくことで、集団は結束を強めることができる	.588	2.85	1.06	.345
3 集団での活動を維持するためには、ときに集団のメンバーを孤立させることも必要である	.546	2.61	1.14	.291
5 集団の結束を固くするために、自己中心的なメンバーは集団に所属させるべきではない	.538	2.91	1.10	.291
4 集団のきまりを守り続けるためには、きまりを破った人を取り除くことが大切である (削除項目)	.501	2.48	1.04	.255
8 きまりを守ることができない人であっても、温かく見守ることが必要である (R)	-.321	3.22	1.06	
7 他のメンバーのために行動する人こそ、集団で必要とされるメンバーである (確認的因子分析によって削除した項目)	.190	3.88	0.99	
2 集団に対して協調的でない人をのけ者にするのは許されない行為である (R)	-.580	2.82	1.04	.331
	因子寄与	3.09		
	累積寄与率	.31		

F1=第1因子への因子負荷量, M = 項目平均, SD = 項目の標準偏差,  $h^2$ =共通性, (R) 逆転項目

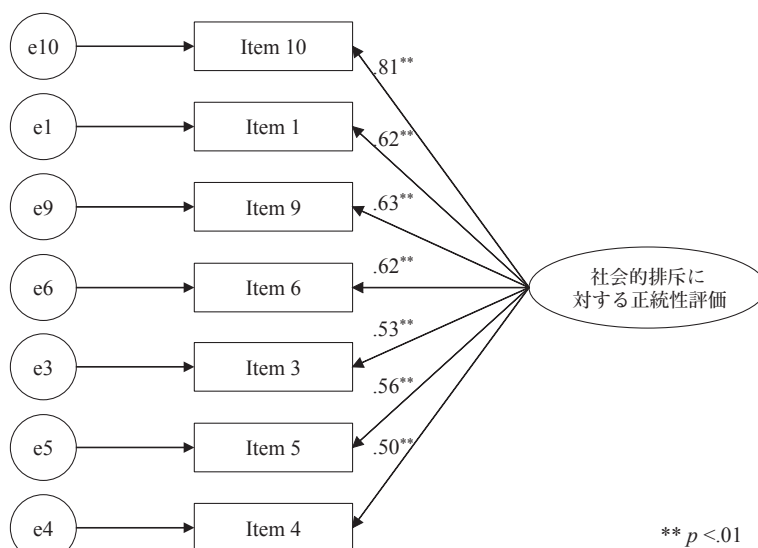


Figure 1 社会的排斥に対する正統性評価尺度の確認的因子分析結果

その結果、社会的排斥に対する正統性評価尺度は十分に高い信頼性を有していることが確認された(サンプルC:  $\alpha = .80$ , サンプルD:  $\alpha = .83$ )。また、基準関連妥当性を検討するための尺度についても、一定の信頼性が確認された (Table 2)。

次に、社会的排斥の正統性評価尺度と他尺度との相関係数を算出した (Table 2)。その結果、社会的排斥に対する正統性評価は、マキャベリアニズム、用心深さ、予

防焦点、関係性モデル尺度の利益・費用計算と、弱いもしくは中程度の正の相関関係にあることが認められた(順に、 $r = .444, p < .001$ ;  $r = .394, p < .001$ ;  $r = .203, p < .05$ ;  $r = .400, p < .001$ )。

これらの結果は予測と一致するものであり、サンプルCとサンプルDにおいて、社会的排斥に対する正統性評価尺度が、理論的に想定される概念を包含していることを意味する。まず、マキャベリアニズム尺度との関連が

Table 2 社会的排斥に対する正統性評価尺度と他尺度との相関係数, 他尺度の記述統計

	<i>r</i>	$\alpha$	<i>M</i>	<i>SD</i>
マキャベリアニズム	.444 <sup>**</sup>	.632	3.28	0.49
予防焦点	.203 <sup>**</sup>	.825	4.63	1.01
用心深さ	.394 <sup>**</sup>	.708	3.65	0.55
費用/利益計算	.409 <sup>**</sup>	.753	5.58	2.43

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

Note. マキャベリアニズムと用心深さはサンプルC, 予防焦点と費用/利益計算はサンプルDを対象とした

確認されたことは、社会的排斥に対する正統性評価が、非倫理的な行為を実行することに伴う社会的痛みを軽減する役割を果たしている可能性を示唆している。また、予防焦点や用心深さとの間に関連が見られたことは、社会的排斥を実行する動機のひとつが、集団内に存在するコストの削減であること (Ouwerkerk et al., 2005) と一貫している。この結果は、関係性モデルの費用・利益計算と正の相関が見られたことにも関連しており、社会的排斥をコストの削減方略とみなす背景に、対人関係を打算的に捉える心理傾向が存在する可能性を示唆するものである。

## 考察

本研究では、人間が社会的排斥を実行するために備えた固有の心理機構として、社会的排斥に対する正統性評価の概念を提案した。また、個人が社会的排斥に対して正統性を評価している程度を測定するための心理尺度を作成し、その信頼性と基準関連妥当性を検討した。その結果、社会的排斥に対する正統性評価尺度は、7項目1因子で構成されており、信頼性も十分な値を示していた。また、他の尺度との相関関係も予測通りであり、基準関連妥当性も十分に高いことが明らかとなった。

従来の社会的排斥研究の主な関心は、“社会的排斥が生じることで、人々はどのような影響を受けるのか”にあった。こうした問題意識の下、従来の研究は、社会的排斥が被排斥者のみならず、排斥者自身や傍観者にまで社会的痛みをもたらすことを明らかにしてきた (Legate, DeHaan, Weinstein, & Ryan, 2013; Wesselmann et al., 2013)。これを踏まえ、近年の社会的排斥研究は、“人間が高度な社会化を遂げるプロセスで、なぜ社会的排斥を実行し続けることができたのか”といった問題意識を扱いつつある (Zadro & Gonsalkorale, 2014)。本研究で提案し、その信頼性・妥当性を検証した“社会的排斥に対する正統性評価”という概念は、人々が社会的排斥を実行するうえで社会的痛みを生じさせないように、固有の心理機構を働かせている可能性を示唆する。

最後に、本研究の問題点と今後の課題について述べる。第1に、本研究の知見は、大学生を対象とした横断データのみに基づいている。社会的排斥に対する正統性評価という構成概念を、人間が一般的にもつ心理機構として提案するには、今後、より多様なサンプルを対象とした調査を実施し、一般化可能性を検討することが必要となる。また、本研究が横断データを用いていることから、本尺度の再検査信頼性や予測妥当性については検討できていない。今後は、同一のサンプルを対象とした縦断研究を行うことにより、社会的排斥に対する正統性評価尺度の構成概念妥当性をより精緻に検討する必要がある。

第2に、社会的排斥に対する正統性評価は、社会的文脈に応じて変化する可能性がある。たとえば、Lancaster (1986) は、社会的ジレンマ状況において、集団間に競争が存在することで、成員同士の協同が促進され、集団内のフリーライダーに対する社会的排斥が生じると主張した。また、マルチレベル選択理論 (multilevel selection theory; Sober & Wilson, 1998) においても、集団間競争場面でこそ、集団内のフリーライダーに対する選択が生じることが指摘されている。企業組織などの集団間競争場面で社会的排斥が顕著になることを考慮すれば (Levine, Moreland & Hausemann, 2005)、社会的排斥に対する正統性評価もまた、集団間競争が生じやすい企業組織と集団間競争が生じにくい仲間集団では異なることが予測される。

第3に、本研究は、社会的排斥に対して正統性を高く評価することが、実際に社会的排斥の実行を促進するのにかについて検討していない。今後は、実際に集団場面を実験室内に再現し、社会的排斥に対する正統性評価が、排斥行為の実行を促すのかを検討することが求められる。また、本研究では、社会的排斥に対する正統性評価が、社会的排斥の抑制要因となる社会的痛みを軽減するメカニズムについても検討していない。脳神経科学の手法を援用した社会的排斥研究の知見では、排斥を実行することが、ストレス反応や社会的痛みと密接に関連することが確認されている (Legate et al., 2013; Poulsen & Kashy,

2012)。今後は、“社会的排斥とは集団内の成員の利益を生み出し、集団を存続させるうえで有効な方略である”という認知的評価が、社会的排斥の実行に際してどのような脳活動と関連しているのかを検討する必要があるだろう。

これらの問題は残されているものの、本研究の見解は、人々が“公正”であることを名目として、集団から他者を追放している可能性を明らかにしている。こうした試みは、高度な神経生理学的発達を遂げた人間のみが備えた、特有の能力の存在を示唆している。すなわち、より多くの人々が大きな利益を得ることが最重要な原理とされる今日の社会において、人々は社会的排斥の正統性評価を巧みに利用し、通常は非倫理的とされる行動さえも実行していると考えられる。人間の利他性や協調性を進化させてきた社会的排斥が、こうした認知プロセスによって導かれているのかについて、今後は、実験やシミュレーションなどを通して体系的に検討する必要があるだろう。

## 引用文献

- 朝野熙彦・鈴木督久・小島隆矢 (2005). 入門 共分散構造分析の実際 講談社
- Baumeister, R.F. & Leary, M. (1995). The Need to Belong. Desire for Interpersonal Attachments as a Fundamental Human Motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Blader, S. L. & Tyler, T. R. (2003). A Four-Component Model of Procedural Justice: Defining the Meaning of a “Fair” Process. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 747-758.
- Chen, Z., Poon, K., Bernstein, M. J., & Teng, F. (2014). Rejection another pains the self: The impact of perceived future rejection. *Journal of Experimental Social Psychology*, 50, 225-233.
- Eisenberger, N. I. & Lieberman, M. D. (2004). Why rejection hurts: The neurocognitive overlap between physical pain and social pain. *Trends in Cognitive Science*, 8, 294-300.
- Eisenberger, N. I., Lieberman, M. D., & Williams, K. D. (2003). Does rejection hurt? An fMRI study of social exclusion. *Science*, 302, 290-292.
- Fiske, A. P. (1992). The Four Elementary Forms of Sociality: Framework for a Unified Theory of Social Relations. *Psychological Review*, 99, 689-723.
- Haslam, N. (1994). Categories of social relationship. *Cognition*, 53, 59-90.
- Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, 30, 1-46.
- 古賀ひろみ (2000). 改訂版マキャベリアニズム尺度作成の試み. 立正大学心理学研究, 42, 83-92.
- Kurzban, R., & Leary, M. R. (2001). Evolutionary origins of stigmatization: The function of social exclusion. *Psychological Bulletin*, 127, 187-208.
- Lancaster, J. B. (1986). Primate Social Behavior and Ostracism. *Ethology and Sociobiology*, 7, 215-225.
- Leary, M. R. & Cottrell, C. A. (2013). Evolutionary Perspectives on Interpersonal Acceptance and Rejection. In C. N. DeWall. (Ed.), *The Oxford Handbook of Social Exclusion*. New York: Oxford University Press. pp. 9-19.
- Legate, N., DeHaan, C. R., Weinstein, N., & Ryan, R. M. (2013). Hurting you hurts me too: the psychological costs of complying with ostracism. *Psychological Science*, 24, 583-588.
- Leventhal, G. S. (1980). What should be done with equity theory? : New Approaches to the study of fairness in social relationship. In K. J. Gergen., M. S. Greenberg., & R. H. Willis. (Eds.), *Social Exchange: Advances in theory and research*. New York: Plenum Press. pp. 27-55.
- Levine, J. M., Moreland, R. L., & Hausmann, L. R. (2005). Managing Group Composition: Inclusive and Exclusive Role Transitions. In D. Abrams., M. A. Hogg, & J. M. Marques. (Eds.), *The Social Psychology of Inclusion and Exclusion*. New York, Psychological Press, pp. 137-160.
- 中村敏健・平石界・小田亮・齋藤慈子・坂口菊恵・五百部裕・清成透子・武田美亜・長谷川寿一 (2012). マキャベリアニズム尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検討. パーソナリティ研究, 20, 233-235.
- Nezlek, J. B., Wesselmann, E. D., Wheeler, L., & Williams, K. D. (2012). Ostracism in Everyday Life. *Group dynamics: Theory, Research, and Practice*, 16, 91-104.
- Ouwerkerk, J. W., Van Lange, P. A. M., Gallucci, M., & Kerr, N. L. (2005). Avoiding the Social Death Penalty: Ostracism and Cooperation in Social Dilemmas. In K. D. Williams & J. P. Forgas (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York, Psychology Press, pp. 321-332.

- 尾崎由佳・唐沢かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性：制御焦点理論に基づく検討. *心理学研究*, **82**, 450-458.
- Poulsen, J. R. & Kashy, D. A. (2012). Two sides of the ostracism coin: How sources and targets of social exclusion perceive themselves and one another. *Group Processes & Intergroup Relations*, **15**, 457-470.
- Sasaki, T. & Uchida, S. (2013). The evolution of cooperation by social exclusion. *Proceedings of the Royal Society B: Biological Science*. **280**, 1-7.
- Sober, E. & Wilson, D. S. (1998). *Unto Others, The Evolution and Psychology of Unselfish Behavior*. Harvard University Press.
- Thomas, E. F. & Louis, W. R. (2013). When Will Collective Action Be Effective? Violent and Non-Violent Protests Differentially Influence Perceptions of Legitimacy and Efficacy Among Sympathizers. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **40**, 263-276.
- Tomasello, M. (2014). The ultra-social animal. *European Journal of Social Psychology*, **44**, 187-194.
- Tyler, T. R. (1997). The Psychology of Legitimacy: A Relational Perspectives on Voluntary Deference to Authorities. *Personality and Social Psychology Review*, **1**, 323-345.
- Tyler, T. R. (2006). Psychological Perspectives on Legitimacy and Legitimation. *Annual Review of Psychology*, **57**, 375-400.
- Tyler, T. R. (2012). Justice and Effective Cooperation. *Social Justice Research*, **25**, 355-375.
- Tyler, T. R., Boeckmann, R. J., Smith, H. J., & Huo, Y. J. (1997). *Social justice in diverse society*. Boulder, CO: Westview Press. (タイラー, T. R. 大淵憲一・菅原郁夫 (監訳) (2000). 多元社会における正義と公正 プレーン出版)
- Wesselmann, E.D., Bagg, D., & Williams, K. D. (2009). "I feel your pain": the effects of observing ostracism on the ostracism detection system. *Journal of Experimental Social Psychology*, **45**, 1308-1311.
- Wesselmann, E. D., Wirth, J. H., Pryor, J. B., Reeder, G. D., & Williams, K. D. (2013). When do we ostracize? *Social Psychology and Personality Science*, **4**, 108-115.
- Williams, K. D. (1997). Social Ostracism. In R. M. Kowalski (Ed.). *Aversive interpersonal behaviors*. Plenum. pp. 133-170.
- Williams, K. D. (2007). Ostracism. *Annual Review of Psychology*, **58**, 425-452.
- 山岸俊男・小見山尚 (1995). 信頼の意味と構造 — 信頼とコミットメント関係に関する理論的・実証的研究 —. 株式会社原子力安全システム研究所 INSS Journal, **2**, 1-59.
- Zadro, L. & Gonsalkorale, K. (2014). Sources of Ostracism: The Nature and Consequences of Excluding and Ignoring Others. *Current Directions in Psychological Science*, **23**, 93-97.

(2014年8月29日受稿)

ABSTRACT

The Legitimacy of Ostracism Scale: Development and Validation

Ryuichi TAMAI and Tasuku IGARASHI

Ostracism, the act of ignoring, exclusion and rejection, occurs across the life span and has been documented as harmful and powerful not only for the ostracized member, but also for the ostracizing member and the observers. To ostracize others, individuals vary in the extent to which they evaluate ostracism as an effective and just method to promote group solidarity and efficiency. In this study, we developed and validated the Legitimacy of Ostracism Scale (LOS) that measures one's tendency to accept ostracizing someone from a group as a legitimate action to increase group benefits. Japanese undergraduates ( $n = 513$ ) completed a questionnaire including LOS (10 items), Machiavellianism, vigilance, relational models, and prevention focus. Exploratory factor analysis indicated a single-factor structure with seven items ( $\alpha = .832$ ). Confirmatory factor analysis on 7-item LOS also indicated that the data best fit a single-factor model. As theoretically predicted, LOS was positively correlated with Machiavellianism, vigilance, orientations for authority ranking and equality matching, and prevention focus. These results demonstrate the high reliability and validity of the 7-item LOS. Further studies need to show that LOS indicates one's actual propensity to ostracize others.

Key Words: ostracism, legitimacy, procedural justice